

## 自働免疫染色装置 3 機種による染色性の比較～Bap1・MTAP 導入検討～

◎松田 竜太<sup>1)</sup>、伊菅 大貴<sup>1)</sup>、熊田 香織<sup>1)</sup>、小山 芳徳<sup>1)</sup>、大塚 喜人<sup>1)</sup>  
亀田総合病院 臨床検査部<sup>1)</sup>

## 【目的】

病理診断を行うにあたり免疫組織染色は重要で、各学会から新しく推奨される情報を反映させる必要がある。近年、悪性中皮腫の診断に、陰性抗体である Bap1 や MTAP の使用が推奨されているが、当院では導入に至っていなかった。今回 Bap1、MTAP の導入にあたり 3 種の免疫染色装置で比較検討を行うことが出来たため、それぞれの染色条件と染色性について報告を行う。

## 【方法】

Bap1 loss 既知検体、肺気腫検体に対し、ロシュ社 BenchMark XT (以下、B.M.)、Agilent 社 Autostainer (以下、A.S.)、Agilent 社 Omnis の 3 機種を用いて、Bap1 および MTAP 抗体の染色条件検討を行う。また悪性中皮腫症例 5 例の染色を行い病理医による評価を行う。

## 【結果】

B.M.では、Bap1 に関して適切な染色像が得られなかったが MTAP (希釈倍率 100 倍) では正しい染色像を得た。一方で、A.S.では Bap1 (同 200 倍、リンカー使用)、

MTAP (同 100 倍) の条件下で、Omnis では (同 100 倍、リンカー使用)、MTAP (同 100 倍) の条件下でそれぞれ良好な染色像を得た。抗体反応時間は B.M.では MTAP で 32 分、A.S.では Bap1、MTAP とともに 20 分、Omnis では Bap1 で 40 分、MTAP で 45 分を要した。

また病理医より診断に際しては、セルブロック検体のような組織評価の困難な症例に対し有用であるとの評価を受けた。

## 【考察】

使用した 3 機種 of 染色性の差の原因として①賦活強度②染色原理の 2 点が考えられる。染色時間が最も短く、染色性も良好であった A.S.は高温と高圧による賦活処理だが、同じ染色原理の Omnis では高圧処理はなく、2 機種間の染色条件の差につながったと考えられる。また、B.M.は他の 2 機種がポリマー法であるのに対し、マルチマー法を用いている。反応感度はマルチマー法<ポリマー法であるため、差がでたと考えられる。

亀田総合病院-04-7092-2211 (内線: 3461)